

# 『モダン・ユートピア』(1)<sup>1)</sup>

## 第1章「地誌」第1節～第6節

H. G. ウェルズ著・小澤正人訳

### 序文 (1925)

『モダン・ユートピア』は形式の面におけるひとつの実験であった。本書は私が『キップス』<sup>2)</sup>を完成させようとしていた時期に書き上げられた。実験の意図は初版の序文中で明らかにしようと努めたので、その序文から、忍耐強い読者の興味を今でも引きそうな部分だけを以下に再録しておく。

この手法は行き当たりばったりの、偶然の産物のような雰囲気をもっているが、見かけほど無造作に作られたものではない。この問題において私が意図してきた一種の明晰な曖昧さにとって、これが最良の方法だと、私は信じている。この手法を採用する前に、ユートピアを描く本の始まり方を何通りか試してみた。理屈っぽい論文的形式は最初から斥けた。その形式は「真剣な」読者と呼ばれる人々にもっとも容易に受け入れてもらえるのだが、多くの場合に、そうした読者は、重要な問題にまわりつき、もったいぶった、忍耐力のない寄生虫でしかない。こうした人々は難解で重々しい文章で書かれ、白黒、イエス・ノーがはっきりしているものなら何でも好んでいるのだが、それは、そうしたやり方ではまったく提示できないことがどれほど沢山あるのかを理解できないからなのだ。曖昧な記述や、同一基準で測れないことが少しでもあったり、また、複合的な表現の持つ軽さとかユーモアや難しさが少しでもあると、必ず、注意を払うことを拒否してしまうのだ。こうした人間は、精神の面では、打破しがたい仮説に基づいて作られているように思われる。スピリット・オブ・クリエイション〈創造の聖霊〉は二つまでしか数えられず、物事を二者択一で論じることしかできないという仮説だ。私は、本書では、こうした読者を喜ばせようとはしないことに決めた。たとえ、私の持っている三斜晶系水晶をすべて立方晶系として提示しなければならなくなるとしてもだ!<sup>3)</sup> はっきり言えば、私はやってみるだけの価値はないと感じていたのだ。しかし、「真剣な」論文を形式として拒否

した後でも依然として非常に悩み、この本の構成をどうしようかと迷いながら何ヶ月も過ごした。はじめは、幾つかの異なった視点から問題を考えていくという、よく認められている手法を試みた。いつも魅力を感じていたのだが、使ってみて成功したことがない方法で、ピーコック（とマロツク氏）が古典の対話形式を発展させたものにならって「議論小説<sup>ディスカッション・ノヴェル</sup>」と呼ばれている手法である。<sup>4)</sup>しかし、不必要な登場人物が入り込み、必然的に彼らの間に複雑な話の錯綜が生じることが煩わしくなり、この方法を放棄することにした。次に、ボズウェルによるジョンソンのような二重の人物と多少似た形式に書きたいことを投げ込んでみようともした。<sup>5)</sup>一人称と注釈者の間のある種の相互作用であり、私の捜し求めている特質により近づきはしたが、最終的にはうまくいかなかった。それから「客観的な語り」とでも呼べそうなものを試してみようかとも迷った。経験を積んだ読者には明白なことだろうが、ある種の思索的、形而上的な要素を省いて、出来事を詳しく述べていけば、この本は分かりやすい直線的な物語に還元されていたかもしれない。しかし、私はこの機会にそうしたものまで省いてしまいたくはなかった。どうして明白な物語を望む野卑な欲望にいつでも迎合しなければいけないのか、私には分からない。そこで、簡単に言えば、この本をこのようにしたのである。私がこうしたことを全部説明するのは、読者が最初にこの本を検討した時にどれほど奇妙に思われようとも、これが試行と熟慮の結果だということ、このままのものとして意図されていたのだということを明らかにしておきたいからだ。私が全体を通して目標としていたのは、一方に哲学的議論があり、もう一方に想像的な物語があり、その両方で作られた一種の玉虫色絹布<sup>シヨット・シルク</sup><sup>6)</sup>のような作品なのだ。

本書の意図についてはここまでしておこう。この本はヨーロッパとアメリカの双方でほどほどの成功を取め、その後、イギリスでは廉価版がかなりの売れ行きをみせた。

本書に合わせて収録したのは「道具についての懐疑」という論文で、オックスフォード哲学協会で1903年11月8日に発表されたものだが、『モダン・ユートピア』で提示された様々な問題をより詳しく論じ、整理している。その後に収録しているものは、出来にはむらもあり種々の問題を扱っているが、著者の作品集に再録するだけの価値があると思われる数編の論文である。<sup>7)</sup>

声の所有者<sup>8)</sup>

著者の描写から始めるのが一番良いという作品がある。本書もそうした本のひとつだ。そして、ごく当然な理解によって、この本では実際のところそれが唯一のとるべき道なのだ。全頁を通してひとつの口調が聞こえてくる。はっきりと区別をつく個人的な口調、時として耳障りになりそうな口調だ。ここに書かれている言葉はゴシック体で印刷されているが、そうでない部分は全てあるひとつの〈声〉が語っている。さて、この〈声〉は、これがこの問題の特異な点なのだが、父親としてこの頁を生み出した表面上の著者の〈声〉として受け取られてはならない。あなたがたはこの点に関しては頭の中から全ての先入観を取り去らなければならない。〈声の所有者〉のことは、次のように想い描くべきである。彼は色白の、丸々太った男性で、やや小柄、中年より少し若く、多くのアイルランド人のような青い眼、動きは敏捷で、頭頂部には小さな禿——ペニー硬貨で隠れる位——がある。腹は突き出ている。私たちの大半と同じように、時にはうなだれることもあるが、ほとんどの場合は雀のように勇ましい態度をとる。時々、動作で説明しようと、手を突き出してひらひら動かしたりする。そして、彼の〈声〉(これがこの後の表現媒体となるのだが)は、時々気に触るものとなるような、魅力的とはいえないテノールだ。その彼が演台を前に座り、ユートピアに関する原稿を読んでいるところを想像してもらわなければならない。原稿は、手首のあたりが太って、少し肉がついた両手で支えられている。そんな彼の頭上にカーテンが上がっていく。だが、この後、もしこの衰退しつつある文学技法の工夫が功を奏していれば、あなたは彼と共に奇妙で興味深い経験をしていくことになるだろう。しかし、時には、彼がああ小さな演台に戻っていて、原稿を手にもユートピアに関する推論を注意深く展開し始めているのに気付くこともあるだろう。これからあなたの前で演じられる出し物は、読みなれた小説作品の型通りの芝居でもないし、いつも避けているような論文の型通りの講演でもなく、その二つを合わせた混成物である。もし想像できるならこう考えてもらいたい。この〈声〉の所有者は、少し神経質そうに、少し控えめに舞台上にいて、演台も水の入ったグラスも何もかも準備万端整っており、また私が口を銜みがちな司会者として袖へ下がる前に、温和に、しかし、無慈悲に、前置きとして「少しお話を」と彼に頼み込んでいるのだと、更に、私たちの友

人の背後に、動く映像が断続的に映し出される幕があると、そして最後に、彼の話す主題がユートピアの探究における彼の魂の冒険の物語になるだろうと。そんな風に想像してもらえれば、この取るに足らない、しかし珍しい作品の持つ困難さの少なくとも幾つかに対する心構えが出来ることだろう。

しかし、この本では、今提示された著者とは反対の側に、地球の人間がもう一人登場する。はじめのうち彼は原稿を読んでいる人間と混ざり合っているが、その後でようやくまとまりを見せ明確な個性を作り上げていく。この人物は植物学者と呼ばれており、はじめに述べた人物よりも痩せていて、かなり背が高く、もっと真面目で、口数はずっと少ない。顔は弱々しそうなハンサムで、蒼ざめた顔色、金髪、灰色の眼で、消化不良症かと思われるかもしれない。これは持って当然の疑問である。司会者がここで突然の解説をさしはさむと、こういうタイプの男たちは卑劣な影を持つ、ロマンティック空想的な人間であり、とてつもない感傷的思考の下に官能的な強い欲望を隠し、同時に、それを形作ろうとしており、女性との激しいもつれや揉め事に入り込んでいく。そして、この男自身も自分の面倒事を持っている。こうしたことについてはいずれ耳にすることになるだろう。それがこうしたタイプの特質だからだ。彼は本書中では個人としての表現手段を持たず、〈声〉は常にもう一人の人物のものであるが、あなたは、〈声〉の脇台詞や意図するところから問題の多くや、彼が口を挟むやり方の幾分かを推測できるだろう。

人物描写として、〈現代のユートピア〉の探検者たちを示すのに必要なのはこの位だろう。この〈現代のユートピア〉は、探究する二人の背景として姿を現していくだろう。映画<sup>9)</sup>という娯楽のイメージこそが理解すべきイメージである。やや不完全な幻灯機ランタンがつくる光の輪の中をこの二人が行ったりきたりしている様子が映しだされている。この幻灯機は時々故障し、時々焦点が合わなくなるが、時折はスクリーン上に〈ユートピア〉の状況を示す束の間の動く映像を映写することに成功する。時によると映像がすっかり消えて、〈声〉が延々と論じ続け、フットライトが再び灯されて、その時、あなたは、少し太りすぎた小男が演台について、苦労しながら自分の主張を論じているのに聞き入っているのだということに改めて気付く。そして、この男の頭上にカーテンが上がっていく。

## 第1章 地誌

### 1

現代の夢想者が考える〈ユートピア〉は、ダーウィンが世界の思想を活性化した時よりも前に計画された諸々の〈どこにもない国〉や〈ユートピア〉とはひとつの基本的な点で異なっていなければなりません。それ以前のものほどれもが完全で静的な〈国家〉であって、幸福は、事物に内在する不安定と無秩序の力と戦って均衡を破り、永遠に勝ち取られたものでした。そこでは、健康で素朴な人々が、美德と幸福という雰囲気の中で大地の恵みを享受し、更に、美德に満ちて幸福で、完全に同じような次の世代がそれに続き、神々が倦み疲れるまで延々と続いていくのを見て取ることができました。変化と発展は破壊不可能な堰<sup>ダム</sup>によって永久にせき止められていたのです。しかし、〈現代のユートピア〉は静的ではなく、動的でなければなりませんし、恒久的な状態としてではなく、長い上昇をなす幾つもの段階へとつながる、希望に満ちた一段階として形作られなければなりません。今日、私たちは状況の巨大な流れに抵抗したり、克服したりすることもなく、その上を漂っています。今、私たちは城砦ではなく、国という船を作るのです。安全で、自分たちと子孫に永遠に保証された幸福の平等性に恵まれたひとつの秩序だった市民組織のために、私たちは「柔軟な共通する妥協、つまりそこにおいて、永遠に続く個人性の新たな継続が、包括的な前進的發展へと最も効果的に収斂していくような妥協」を計画しなければなりません。これこそが現代的な概念を基盤とする〈ユートピア〉と、過去に書かれた全ての〈ユートピア〉との間の、第一にして最も一般化された相違なのです。

私たちがここですべきことは、〈ユートピア〉の住人になることであり、できることなら想像上の丸ごとひとつの幸福な世界のある一面を始めに取り上げ、次に別の面を取り上げて、そうしたものを生き生きとした、信じていることができるものにしていくことです。私たちが入念に計画している目標は、実際には不可能なものではありませんが、今日と明日の間だけに達しているどんな物差しで測っても、実現しがたいものであることはまったく明白です。私たちは、今存在している物事についての執拗な考察にしばらく背を向けて、より自由な空気、もしかすると存在するかもしれない物事からなるもっと広い空間の方を向くのです。そして、「試みるだけの価

値がある」〈国家〉あるいは都市を立案し、おそらく可能であり、しかも私たち自身の生よりも生きる値打ちがあるような生の姿を私たちの想像力という紙の上に計画することに立ち向かわなければなりません。これが、今私たちが行おうとしている企てなのです。まず、出発点となる必要な命題をいくつか規定し、その後更に進んでこうした命題が生み出す社会はどのような種類のものとなるのかを探検してみることにしましょう。……

これは疑いようもなく楽観的な試みです。しかし、私たちが現在の様々な不完全さを論じる時に必ず聞こえてくるに違いない咎めだてするような調子からしばらくの間逃れて、私たち自身を実際上の困難や、方法と手段のもつれから解放するのは良いことです。しばらくの間道端に立ち止まり、ナップザックを傍らに置き、額の汗をぬぐって、自分たちが登っていると考えている山の上の坂道のことを少し話してみるのも良いことです。木々に邪魔されないで、坂道が見えさえすればのことですが。

ここでは、政策や方法の探究は行われません。この本は、政治や運動や方法から離れた休日となるものだからです。しかし、それにもかかわらず、ある種の限界は明確に定めておく必要があります。もし私たちが自由に無制限の欲望を持つことが可能であるならば、モリスにしたがって、彼の〈無何有郷〉へ赴き、人間の本質と事物の本質の双方を変えてしまうべきだろうと思います。人類全体を賢明で、寛容で、気高く、完全なものにしてしまうことでしょ——すばらしい無政府状態に対して手を振って挨拶するでしょう。そこは、その本質において、アダムとイヴが〈墮落〉する前の世界と同じ位に善良で、同じ位に実り豊かで快活な世界であり、誰もが自分の望むことをしていながら、しかも、悪を行おうと望むものは一人もいないという世界なのです。しかし、その黄金時代、その完全な世界は、空間と時間の可能性の中に入って行きます。空間と時間の中で、充満している〈生きようとする意志〉は攻撃の永続性を永遠に維持しているのです。この本での私たちの提案は少なくともそれよりはもっと実行可能な水準にあります。私たちはまず第一に今日の世界の男女に関して知られている人間の可能性の範囲内に議論を限定し、ついで、非人間的なもの全体、自然の不従順性全体に限定していくことにしましょう。私たちの国家を、不確実な季節や、突然の大災害、有害な病、害獣や害虫が存在する世界の中で、私たち自身のものとよく似た情熱や、よく似た気分と欲望の不確実性を持つ男女から形作っていかなければなりません。そして、更に、この闘争の

世界を受け入れ、それに対する拒絶の態度をとらず、禁欲的な精神ではなく、生き延び、克服することを目的としている西洋諸国民の気持ちでそれに直面していくことになるでしょう。私たちは種々の〈ユートピア〉を扱う人たちとはなく、〈ここ〉と〈今〉の世界に関わる人たちと共通するものをたくさん取り入れます。

しかし、最良の〈ユートピア〉の先例にならって、今存在している事実をある程度は自由に変えても良いかもしれません。社会全体の思想傾向は現今の世界におけるものとは完全に違っているかもしれないと仮定しましょう。私たちが知っているような人間精神の様々な可能性の範囲内において、人生の精神的な衝突について自由裁量権を持つと認めておきましょう。更にまた、人間がいわば自分たちのために作った生存のための道具全てに関して、住居、道路、衣服、運河、機械に関して、また、法律、境界、習慣、伝統に関して、学校に関して、文学と宗教組織に関して、信条と習慣に関して、はっきり言えば、人間がそれを変える力を持っている全ての事物に関して、自由裁量権を認めておきましょう。実を言えば、これは新旧全ての〈ユートピア〉的な企てが持つ基本的前提なのです。プラトンの『国家』と『法律』、モアの『ユートピア』、ハウエルズの含蓄深い『アルトゥルーリア』、バラミーの未来のボストン、コントの〈大ヨーロッパ共和国〉、ヘルツカの『フリーラント』、カベの『イカリア』、カンパネラの『太陽の都』は、私たちが構築しようとしているものと全く同様に、この前提の上に構築されています。つまり、人間の共同体を伝統や習慣、法的束縛から、そして、所有が含意しているあのより説明しがたい隷属から完全に解放するという仮説の上に構築されているのです。そして、全てのこうした思索の本質的な価値の多くがこの解放という前提の中に存在しています。人間の自由に向けられたあの顧慮の中に存在し、自分から抜け出していく人間の力、つまり、過去の因果関係に抵抗し、回避したり、着手したり、努力したり、克服したりしていく力へのやむことのない関心の中に存在しているのです。

## 2

非常に明確な芸術的限界もまた存在しています。ユートピアについての考察には常にある程度の硬さと希薄さという効果がなければなりません。そうした考察に共通する失敗は、完全に無味乾燥なことです。人生の血と

温かさと真実となるものが大幅に欠如していて、個人性のない、一般化された人々しかいないのです。ほとんど全ての〈ユートピア〉で——多分モリスの『ユートピアだより』を除けば——目に入るものは、立派だが個性のない建物、均衡の取れた完璧な教養、健康で幸福で、美しく着飾ってはいてもまったく個人の区別がつかないような無数の人々だけです。その眺めは、ヴィクトリア朝時代に非常に人気のあった戴冠式や皇室の結婚式、国会、会議、集会を描く大きな絵画にそえられた説明用の人物対照表とそっくりです。個々の人物には顔の代わりに見やすい楕円が描かれ、参照用の番号が明瞭に書き込まれています。この欠点が、非現実性という治療不可能な効果を生むことになり、一体どうすればそれを避けることができるのか私には分かりません。これは受け入れなければならない不都合です。かつて存在したか、あるいは今存在している制度ならどんなものでも、たとえどれほど非合理的で、どれほど馬鹿げているとしても、それが個々のものと接しているということによって、これまで試されたことがないものには共有できない実在性と正真性という効果を持っています。そうした制度は成熟し、血の洗礼を受け、運用されることで汚れて練れたものとなり、丸みを帯びたり、窪みがついたりして、私たちが生命を連想する柔らかな輪郭を持つようになりました。それはたぶん涙の塩で塩漬けにされてきたのです。しかし、単に提案されただけのもの、ほのめかされただけのものは、どれほどに合理的でどれほどに必然的なものであったとしても、明確でくっきりした妥協のない線で描かれ、不適切な角度と表面からできているために、奇妙で非人間的に思われてしまいます。

これはしかたがないことです。そうになってしまうのです！〈支配者〉は後継者の中で最後の、一番小さな人物に悩まされます。対話という演劇的な技法を通してプラトンがどれほどの人間性に辿り着いているとしても、それに勇気付けられて自分も彼の〈共和国〉の市民になりたいと望んだものがいたかどうかは疑わしいと思われれます。モアが計画したように美德を厳格に公開していくことに一ヶ月でも耐えられるものがあるかどうか疑わしいと思います。そこで出会うであろう個々の人々のためであれば、どのようなものであれ、人間関係のある共同体で本当に暮らしたいと望むものは一人もいません。人生を豊かにするような個人性の衝突が一人一人の生活の究極的な意味であり、私たちの〈ユートピア〉全体はその相互作用を改善していく計画案に過ぎません。少なくとも、そのようにして

こそ人生が次第に現代的知覚へと形成されていくのです。あなたが個人性を生じさせるまでは何も存在するようにはなりませんし、あなたがごくわずかでも個人の精神を映し出している鏡を粉碎した時、〈宇宙〉は滅びるのです。

### 3

惑星ひとつ分の大きさがなければ、現代的な〈ユートピア〉という目的には役に立ちません。かつては山中の谷間か島がひとつあれば、政治組織が外部からの力の影響をまったく受けないでいるだけの孤立性を保証できるように思われた時代もありました。プラトンの〈共和国〉は防衛的な戦いに備えて軍隊を持っていました。〈ニュー・アトランティス〉やモアの〈ユートピア〉は、中国や日本が何世紀にもわたって効果的に実践していたのと同じように、理論上は侵入者から自らを隔離していました。パトラーの諷刺的な〈エレホン国〉や、ステッド氏の描く性的状況が逆転した中央アフリカの女王国<sup>10)</sup>のような近年の例は、調査に来た人間を皆殺しにするというチベットの方法を単純で十分な原則だと考えていました。しかし、現代的な考え方の趨勢はどれもが、囲い込みを永続していくこのようなやり方とは対立しています。私たちが今日強く意識しているのは、ある〈国家〉がたとえどれほど巧妙に工夫して作られていたとしても、国境線の外側では疫病や増え続ける野蛮人や経済的な力が次第に強力になっていき、あなたたちを打ち負かそうとするだろうということです。発明の急速な発展は全てが侵略者に与しています。多分、今でも、岩だらけの海岸や狭い山道を防衛しているのですが、飛行機械が頭上を飛び、どこにでも自由に着陸できるようになった近い未来ではどうなることでしょうか？<sup>11)</sup>現代の諸条件下で孤立状態を維持できるほど強力な〈国家〉なら世界を支配できるくらいに強力でしょうし、実際のところ、人間が作る他の組織全てを、仮に積極的には支配していないまでも、消極的に黙認し、そうしてそれらへの責任を負うでしょう。それ故、その国は〈世界国家〉となるに違いありません。

そうなると、中央アフリカとか南アメリカや極地といった理想郷の最後の避難場所にも現代の〈ユートピア〉を置ける場所はありません。『モレリの都市』<sup>12)</sup>の浮かぶ島はもはや役にたちません。私たちには惑星が必要なのです。ヒューインズ氏からヒントを得たのかもしれない〈ユートピア〉

(『アルマータ』)の著者アースキン卿は全ての〈ユートピア〉構築者の中でこの考えを受け入れた最初の人物であり、双子の惑星の極同士を一種の臍の緒で結びつけました。<sup>13)</sup>しかし、現代人の想像力は物理学に取り憑かれているので、これよりも遠くまで旅をしなければなりません。

シリウス<sup>14)</sup>を越えて、宇宙の深遠の遙かかなた、砲弾が十億年かけて進む距離を越え、肉眼で見える限界の向こうに、私たちの〈ユートピア〉の太陽となる星が輝いています。どこを見たらよいか知っている人間が性能の良いオペラグラスを良い目にあてれば、その星と、それと一団になっているように見える三つの僚星が——実は、信じられないことに何十億マイルも手前にあるのですが——ほんの幽かな光の点となっているのが見えます。その周囲を幾つもの惑星が、私たちの太陽系の惑星と同じように、しかし異なる運命を織り成しながら回転し、そうした惑星の中に〈ユートピア〉があるべき位置を占めていて、妹のような仲間である〈月〉もそこに存在しています。この惑星は私たち自身の惑星と似ていて、同じ大陸、同じ島、同じ大洋があって、もうひとつの富士山がもうひとつの横浜を見下ろして美しくそびえ——そして、もうひとつのmatterホルンがもうひとつのテオドゥル峠の氷だらけの道を見張っています。<sup>15)</sup>ここは私たちの地球にあまりにも良く似ているので、地球の植物学者は最も平凡な水草のヒルムシロやアルプスの奥に咲く花にいたるまで全ての種をここで見つけ出すことができるでしょう。……

ただ、彼が最後の一本を採集してから振り返って、泊まっている宿屋を探してみても、多分見つけ出すことはできないでしょう！

さて、ここで私たち二人が実際にそんな風に振り返ろうとしているところを想像してください。なぜ二人なのかといえば、たとえ完全に文明化している惑星だとしても、助けてくれる人間が一人もいないままで見知らぬ惑星に直面させられることになれば勇気がすっかり挫けてしまうだろうと思われるからです。私たちが、ほとんどいながらにしてそんな風に移動してしまったと想像してください。あなたは私たちがアルプス山中の高い峠にいたるところを思い浮かべます。そして、私は——前かがみになるとすぐ眩暈がするので——植物学者にはなれないにしても、もし私の同伴者がブリキ製の採集標本用胴乱を小脇に抱えていることになっているのなら——あの良く見かけるスイスリングのような恐ろしい緑色に塗ってなければ持っているのですが——これを口論のきっかけにしたりはしないで

しょう！ 私たちはあちこち歩き回り、植物を採集し、一休みし、岩の間に腰を下ろして昼食をとり、イヴォルヌ<sup>16)</sup>を一瓶空け、〈ユートピア〉に関する話を始め、先刻私が述べたようなことを話していました。私自身、自分がルツェンドロ峠の隘路や、ピッツォ・ルツェンドロの肩部にいるところを想像できるでしょう。<sup>17)</sup>以前そこで朝食をとり、とても楽しい会話をしたことがあるからです。そして、私たちはベドレット溪谷を見下ろすでしょう。ヴィラとフォンタナとアイロロが山の斜面で私たちから隠れようとしています——垂直に四分の三マイル下方です。(幻灯機<sup>18)</sup>) アルプスに行くとき経験する、ものが近くに見えるあの不思議な効果のせいで、十数マイル離れた小さな列車がピアシーナを下ってイタリアに行くところが、ピオラの向こうのルクマニョ峠を左に、サン・ジャコモを右にして、すぐ足元のほんの小さな道のように見えます。……

ところが、ご覧のとおり！ まばたきひとつの間に、私たちはあの別の世界にいるのです！

私たちはその変化にほとんど気付かないでしょう。空から雲ひとつ消えるわけではありません。下方はるか遠くの町は何か違った様子に見えるかもしれませんが、一緒にいる植物学者は専門教育を受けた者の観察眼でそれなりのことを見て取るかもしれません。そして、多分、列車は私たちが見ている景色から消えてしまって、アムブリ＝ピオッタの草原にティツィーノ川の堤防が長い直線となって続いています——そうした点は違っているかもしれませんが、目に見える変化はそれだけでしょう。しかし、何かはっきりしない形でですが、同時に色々なものに違いを感じるようになるだろうと考えます。

植物学者はなんとなく注意を引かれて、ふとアイロロへと視線を戻すでしょう。「奇妙だな」何気なく彼は言います。「だけど、さっきまでは右の方にあの建物があるのに全く気がつかなかった」

「どの建物？」

「あの右手の——変なものは——」

「ああ、分かった。うん、そうだ、確かに見た目が奇妙な。…… それに大きいな。立派だ！ もしかすると——」

これによって〈ユートピア〉に関する私たちの考察が中断されるでしょう。二人とも下の小さな町が変わってしまったのに気付くでしょう。しかし、どのようにして起こったことなのでしょう？ 私たちはそれが分かる

ほどにはよく見ていなかったのに違いありません。うまく説明することはできないでしょう。建物の配置の特徴が違い、遠くの小さなものの特徴が違っています。

多分、私は膝からパンくずを少し払うでしょう。立ち上がりながら、私たちは「おかしいな」とこれで十度目か十一度目になる言葉を繰り返して、立って伸びをし、なおも少し奇妙に思いながら小道のほうに目をやります。道はごろごろした大岩を越えて、水面が穏やかに澄んだ湖を迂回し、ザンクト・ゴットハルト<sup>19)</sup>の旅人宿泊所へ向かって下っています——もしもまだ道を見つげられるものならばですが。

私たちはそこに着くよりもずっと前から、いや、大きな本街道へ出るよりもずっと前から、峠の首筋辺りの石造りの小屋を見て——消え去っているか、見事に違うものになっているかのどちらかでしょうが——なんとなく感じ取っていることでしょう。そして、岩場にいる山羊や、また素朴な石橋のそばの小屋を見て、人間の世界がとても大きく変わってしまっていることを感じ取っているでしょう。

やがて、私たちは一人の男にばったり出くわし、互いに相手に驚き、また相手を驚かすでしょう——彼はスイス人ではなく——見たことのない服装で、聴いたことのない言葉をしゃべっています。

#### 4

日が暮れるまでには、私たちは驚きで一杯になっていることでしょう。それでもまだ知らずにいる驚きがあります。それについては私の同伴者が、科学的訓練を受けていたおかげで、きっと最初に気付くことになるでしょう。彼はふと空を見上げ、自分の世界の星座についてギリシア文字で示される細部まで知っている人間が持つ識別力を備えた目で夜空を見ます。<sup>20)</sup> 彼が驚愕の叫び声をあげる様子が想像できます。彼は始め自分の眼を疑うでしょう。私は驚いた理由を尋ねますが、説明するのは困難です。彼はいかにも彼らしい態度で、「オリオン」を見つけるよう頼んでくるのですが、私には見つけることができないでしょう。「大熊座」を探すようにとも言われますが、それは姿を消してしまっているでしょう。「どこにあるんだ？」私は星がちりばめられた夜空を探しながら尋ねます。「どこだ？」そして、彼に取り付いた驚きを自分でもゆっくりと感じていくでしょう。

それから、この見慣れない天空を眺めた後で、多分、ようやく、世界が

変わったのではなく、私たち自身が変わったのだと——宇宙の果ての果てまで来てしまったのだということを理解するに違いありません。

## 5

交流を妨げる言語上の障害を想定する必要はありません。世界全体がひとつの共通言語を使用しているのは確実ですし、まさしく基本的にそうあるべきものです。そして、説得力のある物語の進め方をするという束縛から解放されているのですから、その言語は、理解に不自由がないくらい十分に私たち自身の言語となっていると仮定しておいていいでしょう。実際、誰とでも話せるということができないのならそもそもユートピアにいるといえるでしょうか？ 言語という呪われた障壁、外国人の目に刻まれた敵意のこもった銘文「あなたの言葉は聞いても分からないし、話すこともできません。それ故に——あなたの敵です」は、地球を脱出することで捨て去ろうとした種々の欠点と難問の中でもまさしく第一のものです。

しかし、世界がどんな言語を使用していることにしたらいいでしょうか？ もしパベルの塔の奇跡がやがて逆方向に行われるということが語られるのだとしたら。

もし私が大胆な想像図を描いていいのなら、中世的な自由を行使してもよいのなら、この寂しい惑星で〈創造の聖霊〉がこの問題に関して語りかけたのだと仮定するでしょう。「あなたたちは賢い人間だ」と〈聖霊〉は言うかもしれません——そして私は肥満の傾向があるにもかかわらず、疑い深く、怒りっぽく、真面目すぎる人間なので、即座に皮肉をかぎつけるでしょう。(一方、私の同伴者は得意満面にさえなっていると思います。)〈聖霊〉は言葉を続けます。「そして、あなたたちの知恵を生み出すことが、世界が作られた主たる理由なのだ。あなたたちは非常に善良なので、私がたずさわっている退屈で広大な進化を加速しようと企てることができる。世界共通語はその時に役に立つだろうと思う。ここで、この山々の間に座っている間に——私はこれまでの永遠のように長い時間、あなたたちの宿屋をここに呼び寄せるためだけに山々を削っていたのだが——もしよければ——？ 幾つかヒントを——？」

そこで〈創造の聖霊〉は一瞬の笑みを浮かべるでしょう。雲が空をよぎっていくような微笑です。周囲の山中の荒地全体が明るく照らされます。(あなたは寂しい人気のない場所で暖かさと輝きが流れ去っていく時のあの一

瞬を知っていることでしょう。)

しかし、ともかくも、二人の男が〈無限〉から微笑みかけられて、どうして無関心であることができるのでしょうか？ 私たちはここにいて、でこぼこした頭と、眼と手と足と丈夫な心臓を備えているのですし、仮に私たちや私たちの仲間ではないにしても、私たちの周りにいたり、これから生まれたりする無限に多くの人々が最後には〈世界国家〉や今よりも大きなフエローシップ<sup>フエローシップ</sup>や世界共通語へと辿り着くに違いありません。たとえこの問題に答えを出すことはできないまでも、ともかくも全力を尽くして可能なものうちでも最上のものが見えてくるところまで考えつめてみようではありませんか。結局はそれが私たちの目的なのです。想像力を最大限に働かせ、それを探究していくことが。そして、多くの太陽のような偉人たちの間では最上中の最上のものでさえみすばらしいものに見えるからということで、努力を放棄してしまうのなら、それは凶々しくやってしまうことよりもっとひどい愚行であり、もっとひどい罪なのです。

さて、植物学者としてのあなたは世に言う「科学的な」ものに向かいがちな傾向があると私は考えます。あなたはこのとても不愉快な形容語句にひるみまず——そして私もあなたに知的共感を感じることはできません——もっとも「偽科学的」とか「疑似科学的」といった語のほうがはるかに悪いものではあるのですが。あなたは科学的言語のことから話を始めましょう。エスペラントやラング・プロ、新ラテン語、ヴォラピューク、リットン卿、ウェイトリー大主教の哲学的言語、ウェルビー准男爵夫人の意味学に関する著作等々についてから。<sup>21)</sup>あなたは私に化学の用語の見事な正確さ、その百科事典的性格について語り、そして用語法という言葉聞いて私はアメリカのあの著名な生物学者マーク・ボールドウィン教授に関する言及をほのめかすでしょう。<sup>22)</sup>彼は生物学の言語を深遠な明瞭性のはるかな高みに引き上げ、あまりに見事で誰もかなわないほどに解説不可能になったのです。(これは私の防御の境界線を前もって示しています。)

あなたは自分の理想を明確にします。あなたが要求している科学的言語は、二義性を持たず、数学の公式のように正確で、全ての用語が他の全ての用語と正確な論理的一貫性を持って関係しあっています。それは、動詞と名詞の屈折が全て規則的で、文法的構成は必然的に決まり、各語は綴りだけでなく、発音においても他の全ての語からはっきりと区別されているような言語です。

ともかく、そうしたものが、必要だと聞かされている種類のものでし、仮にその要請が言語の領域をはるかに超えて広がる含意に基づいているという理由からだけであるにしても、ここで考察してみるだけの価値があります。はっきり言えば、それは私たちがこの特定の作品において存在を認めないように努力しているほとんど全てのことを含んでいます。人類の知的基盤が全て確立されていること、そして論理の諸規則や計算や計量の体系、類似と相似に関する一般的な範疇と配列が人類のために永遠に確立されているということを含意しています——実際には、最も空虚な描写による空虚なコント主義です。<sup>23)</sup>しかし、実のところ、人類がプラトンとアリストテレスの時代から持ち続けてきた論理の科学と、哲学的思考の全体的枠組みは、人間精神の最終的な表現としては、スコットランドの〈大公教要理〉同様に、本質的な永遠性を持たないものに過ぎません。<sup>24)</sup>現代思想の混乱のただ中で、人類から長い間失われていたある哲学が再び存在するようになって来ました。やがて視力を持ち、形と力を備えていくに違いないけれど、今はまだ視力を持たず、ほとんど形もできていない胎児のような状態にある哲学で、この仮定を否定している哲学です。<sup>25)</sup>

ここでの〈ユートピア〉逍遙の全体を通して、あなたがこの反乱を引き起こしそうな運動による攻撃や擾乱を感じることもあるだろうと警告しておかなければなりません。「唯一<sup>ユニーク</sup>的な」という語が繰り返して使用されると、いわばその外皮のきらめきを感じるでしょうし、人生の意義としての個性や個人的相違の強調にはその形成されつつある総体の組織を感じるでしょう。持続していくものは何もないし、(術学者の精神を除けば)正確で確実なものもないし、完成とは不可避免的に存在する周縁的不正確さを単純に拒絶することでしかないのですが、その不正確さこそ〈存在〉が持つ神秘的で最も奥深くにある性質なのです。〈存在〉、まさにその通り！——個人性の普遍的生成以外に存在などはなく、プラトンは種概念的理想を収める彼の博物館の方を向いた時、真実に背を向けたのです。あの失われた、誤解された巨人ヘラクレイトスなら多分正当な評価を手に入れるかもしれませんが。……

私たちが知っているもののうちには、そのままであり続けるものはありません。私たちは弱い光からより強い光へと変化し、前よりも強力になった光のひとつひとつがそれまで不透明だった基盤を貫き、その下の新しい別の不透明部分をあらわにします。確実なように思われている基盤的事物

のうちのどれであれば次の変化による影響を受けずにいるかを事前を知ることはできません。そうだとするならば、たとえどのような普遍的名辞を使うにしても、私たちの精神の地図を作ろうとか、未来の尽きることのない神秘に備えて専門用語集や熟語集を準備しようと夢想することはなんという愚考なのでしょう！ 私たちは鉱脈を辿り、宝を掘り出して蓄積しますが、鉱脈がどちらの方向に続いていくのかを誰が知ることができるのでしょうか？ 言語は人間の思考の滋養物で、新陳代謝を経ている時にだけ役に立ち、思考と生命になり、そしてその生そのものの中で死んでいきます。あなたたち科学的な人々は、言語における恐るべき正確さと、『ネイチャー』誌の扉頁に掲げられたワーズワースの狂詩が言うところの「永遠に」築かれた破壊不可能な基礎に関する<sup>ファンシー</sup>夢は持っているのですが、驚異的なまでに想像力が欠如しています！<sup>26)</sup>

〈ユートピア〉の言語が単一で分割不可能なのは疑いないでしょう。全人類は、個々人の質的な相違をある程度残しながらも同一の段階へ、共通の思考の共鳴へと導かれていくでしょうが、彼らが話すことになる言語は依然として生きた言葉、不完全なものからなる命を吹き込まれた体系であることでしょうし、それをひとりひとりの個人がごくごく僅かずつ改変していくでしょう。世界的な交易と移動の自由を通して、その全体的な精神における発展的变化は世界全体にわたるものとなっていくでしょう。それが、その普遍性という性質なのです。私は、それは合体した言語、多くのものの総合だろうと思います。英語のような言語は総合的言語であり、アングロサクソン語とノルマン人のフランス語と学者のラテン語がひとつとなった総合的言語で、それらが結合してもとのどれかひとつよりもっと大きく、力強く、美しい話し言葉となっています。〈ユートピア〉の言葉がそれよりも大規模な総合を見せるのは当然でしょうし、英語がすでに示しているような、屈折が無い、ごく僅かしか屈折しない語法の枠組みの中に豊かな語彙を持っていて、その語彙の中では以前は別々のものだった一ダースほどの言葉が投げ込まれ、重ね合わせられ、更に二言語併用的、三言語併用的な折衷を通して結合されているでしょう。<sup>27)</sup>過去において天才的な人々が「どの言語が生き残るか？」という問題を考察してきました。これは間違った問題の立て方をしています。私は、今述べたような、幾つかの言語が結婚して共通の子孫の中に残っていくということのほうがはるかにありそうではないかと考えています。

6

しかし、言語に関するこの話は本筋を離れてしまいました。私たちはルツェンドロ湖<sup>28)</sup>の周囲をめぐる、かろうじて道と呼べそうなところを辿っていて、最初の〈ユートピア〉住人と出くわす直前でした。彼は、すでに述べたように、スイス人ではありませんでした。しかし、もし母なる地球にいたとすればスイス人だったでしょうし、この世界でも、表情に多少の違いはあるかもしれませんが、同じ顔をしているでしょう。また、彼のほうが少し良く発達しているかもしれませんが、同じ体つきで、同じ顔色をしているでしょう。違う習慣、違う伝統、違う知識、違う観念、違う衣服、違う道具類を持っていますが、そうしたものを除けば、同一の人間でしょう。最初にきわめて明確に規定しておいたのは、現代の〈ユートピア〉には、こちらの世界に住む人々と先天的には同じ人々がいなければならないということでした。

この点については多分はじめに示唆した時に思われた以上の意味があります。

この提案は、現代の〈ユートピア〉とそれに先行するほとんど全てのものとの間にひとつの特徴的な相違点を生み出しています。前者は世界規模の〈ユートピア〉であり、それ以下のものではありえないということに私たちは同意しました。そこで、私たちは人種間の相違も存在するはずだという事実に直面しなければならなくなるに違いありません。プラトンの〈共和国〉の下層階級でさえ明確には別の人種ではありません。しかし、ここはキリスト教の博愛と同じだけの広さを持つ〈ユートピア〉であり、白色、黒色、茶色、赤色、黄色、全ての肌の色合いと全ての型の肉体と形質が存在しているでしょう。どのようにしてそのような違いに適応しなければならないかということは、重要な問題ですが、この章では話を始めることさえできないほどの事柄です。この点に関する諸問題をざっと見ていくだけでも丸々一章が必要になるでしょう。しかし、ここでは次の条項だけを強調しておきましょう。つまり、この惑星地球の全ての人種を、最も厳密に対応する相似関係において、あちらでも見出すことができ、数においても同じであり——ただ、今述べたように、伝統、理想、観念、目的において全く違う種類の組み合わせを持ち、違う空の下で全く違った運命に向かって進んでいるのです。

そこから、<sup>ユニークネス</sup>唯一性と個人性の唯一的意義をはっきり認識している人なら

誰もが奇妙に感じられるものへとこの問題は発展していきます。種族とは決して強固でしっかり結びついたものではなく、同一的に類似した人々の集団でもなく、それぞれなりの唯一的な種類なりに集団化した亜人種や部族か家族であり、更にもっと小さな唯一的存在の集合から、それぞれの何人かずつの個人にまで及んでいます。そういうわけで、私たちの第一の決まりをこれに適用すると、地球の個々の山、川、植物、動物がシリウスの彼方の類似関係にある惑星に存在するだけでなく、現在生きている男性、女性、子供全員の一人一人が〈ユートピア〉において各自に対応する相似的存在をもっているということになります。もちろん、ここからこれら二つの惑星の運命が分離して行き、向こうでは知恵によって生き延びる人がここでは死ぬかもしれませんし、多分、逆にこちらで私たちが人々を助けることもあるでしょう。彼らのところに子供たちが生まれ、私たちのところでは生まれないこともあるでしょうし、こちらに生まれ、あちらに生まれないこともあるでしょう。しかし、これは、講演をしている今この時が開始の時であって、最初にして最後の機会として今は両惑星の人口が同等となっているのです。

私たちは今日ではそうした仮定をしなければならないのです。そうしない場合には、天使に似た人形の〈ユートピア〉——想像上の法を、信じられないほど素晴らしい人々に合わせた、魅力のない企てになってしまうでしょう。

例えば、私たちは、私がそうでありえたかもしれないような人間、つまりもっと多くのことを教えられて、もっと良い訓練を受け、もっと良い仕事に従事し、もっと痩せていて、もっと活動的な人間がいると仮定しなければなりません——その時、彼は一体どんなことをしているのでしょうか！ ——そして、男性であるにせよ、女性であるにせよ、あなたも瓜二つに複製されていますし、あなたと私が知っている全ての男女もそうなのです。私たちが自分の分身<sup>ダブル</sup>に出会うことがあるかどうか、あるいはそうなったなら楽しいかどうかは疑わしいと思います。しかし、私たちがこのさびしい山中から〈ユートピア的世界国家〉の道路や家々や生活の場へ下ってきた時、私たちは、地球ですぐ目の前に暮らしていた人たちと不思議なほど良く似た顔を必ずそこかしこで見つけ出すことでしょう。

絶対に合いたくないような人たちもいるとあなたは言うでしょうが、そういう相手に会うこともあるだろうと思います。「よりによって——！」

奇妙なことですが、この植物学者の姿はいつもその場にあるわけではありません。親愛なる読者よ、彼の姿は一時的に使われる説明用の考案物のように私たちの前に出現するのです。どういうことから彼を思いついたのかは分かりませんが、少しの間その男の性格をあなたに押し付けて、あなたを——あの実にひどい悪口で——科学的と呼ぶことは、当座の私の気持ちに丁度うまく合っていたのです。しかし、ここで彼は、議論の余地なく、私と共に〈ユートピア〉にいて、私たちは高度に思索的なテーマから離れて、言葉につまりがちなが、親密な間柄での打ち明け話へと陥りつつあります。自分は悲しい不幸と再会するためにユートピアに来たのではないと彼は断言します。

どんな悲しみなのでしょう？

私は、温かくとさえ言えそうな調子で、彼も彼の悲しみも私の意図したものではないと抗議します。

私が想像するに、彼は三十九歳の男性で、その人生が悲劇でもなく、愉快な冒険でもなかった人間であり、自分の人生との関わりから、力や高貴さよりもむしろ利益を得てきたような顔つきをした人間の一人です。洗練されていて、多分、軽い悲しみと全ての礼儀正しい自制心に関する知識を持っています。苦しんだ量よりも本を読んだ量のほうが多く、成し遂げたことよりも苦しんだことのほうが多い。彼は青灰色の眼で私を見つめていますが、その眼からはこのユートピアへの興味が全て消え去っています。「僕の人生に起こったトラブルなんだ、ほんの一ヶ月かそこら——ともかく、また激しくなって」と彼は言います。「全部終わったと思っていた。ある人がいて——」

〈ユートピア〉の山頂で耳にするには驚くべき物語です。このハムステッドでの情事、このフログナル<sup>アフェア</sup><sup>29)</sup>の愛の物語は。「フログナル」は、彼によると二人が出会った場所で、それを聞くと、丘の上まで邸宅が続く風景の燧石舗装した新しい道路、地区開発道路の隅にある掲示板にこの語が書かれていたことが思い出されます。彼は教授職を得るよりも前に彼女と知り合っていましたが、彼女の方の「人たち」も、彼の側もこの情事を認めていませんでした——彼は、叔母達や金に関わる事物や介入する権利のことを「人たち」と呼ぶあの嫌悪すべき中流階級特有の言葉遣いで話すのです。「彼女は割りと簡単に言いなりになってしまったと思う」と彼は言います。「だけど、それでは多分彼女に公平じゃあないだろう。他の人

たちのことを考えすぎていたんだ。もしその人たちが当惑しているように見えたり、成り行きについて考えが——」。……

私はこんな類の話を書くためにユートピアに来たというのでしょうか？

## 注

- 1) 『モダン・ユートピア』(2)は『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第20号(2019年発行予定)に掲載予定である。解説も(2)に付す。
- 2) 『キップス——ある単純な精神の物語』*Kipps* (1905)。幼くして孤児となったキップスは祖父母に育てられた後、洋服店の住み込み店員をしていたが、思いがけなく大金の遺産を手に入れる。彼は憧れていた上流階級の女性と婚約するが、生活の違いになじめず、結局幼馴染の娘と結婚する。
- 3) 三斜晶系 結晶の三つの軸の長さがそれぞれ異なり、互いに斜めに交わるもので、斜長石などがある。立方晶系は、等軸晶系ともいい、三つの軸がすべて同じ長さで直行しているもので、ダイヤモンドなどがある。OED 初出1854年。
- 4) ピーコックについて、ペンギン版の注は、Ferdinand Mansel Peacock (1861-1908)か Thomas Love Peacock (1785-1866)ではないかと示唆している。前者はイギリスの小説家で、軽装歩兵としてインドやアフリカで従軍し、軍隊小説などを書いた。後者はイギリスの諷刺小説家、詩人。東インド会社に勤めながら小説を書いた。田舎の屋敷に集まった人々が議論を続ける小説『夢魔院』(1818)がある。

W. H. マロック (1849-1923) はイギリスの経済学者、社会学者、小説家。保守主義者で、熱心なイギリス高教会派の信者であった。『新しい国家』(1877)で知られる。これは、プラトンの対話篇『国家』の形式を借り、ウォルター・ペイターやマシュー・アーノルドらをモデルにした人物たちの対話を通して、信仰が後退し、合理主義・物質主義が広がる当時のイギリスの精神状況を描く。
- 5) ジェイムズ・ボズウェル (1740-1795) はスコットランドの法律家、著述家。文豪サミュエル・ジョンソン (1709-1784) を尊敬し、彼に関する詳しい伝記『ジョンソン伝』(1791)を書いた。
- 6) ショット・シルク shot は、縦糸と横糸の色が異なる織物で、角度により色が変わって見えるものを言う。
- 7) アトランティック版作品集第9巻には『モダン・ユートピア』と「道具についての懐疑」に併せて以下の評論が含まれている。「現代の小説」「チェスタートンとベロックについて」「アメリカの展望」「理想の市民」。

- 8) 原著ではこの部分はすべてイタリック体で印刷されている。
- 9) 映画 cinematograph スクリーンに拡大映写する映画は1895年にリュミエール兄弟(兄オーギュスト(1862-1954)、弟ルイ(1864-1948))が上映したシネマトグラフが最初とされる(この語のOED初出は1896年。)イギリスでの最初の映画上映は1896年にR・W・ポールとパート・エイカーズがロンドンで行った。

## 第一章

- 10) W. T. ステッド(1849-1912)はギリスのジャーナリスト。タイタニック号沈没時に死亡。『嫌悪された性——キャリラテスからディオーンへの手紙』(1903)は、中央アフリカから来たアマゾンの女性によるヨーロッパ旅行記の形をとる小説。ペンギン版の注によれば、フェミニズム以前あるいは原フェミニズム的ユートピア。
- 11) 飛行機械、ライト兄弟による動力付き飛行機の初飛行は1903年12月。
- 12) エティエンヌ・ガブリエル・モレリはフランスの著述家だが詳細は知られていない。1717-18年生まれと推測されるが、没年は不詳。『バジリアッドまたは浮き島の難破』(1753)や『自然の法典』(1755)で共産主義的ユートピアを描く。
- 13) ウィリアム・アルバート・サミュエル・ヒューインズ(1865-1931)は経済学者、保守党政治家。トマス・アースキン(1750-1823)はイギリスの政治家、法律家で男爵。『アルマータ』では南極付近で難破した船が海峡を抜けて別の惑星に辿りつく。
- 14) シリウスは大犬座の主星となる青白色恒星。地球からの距離7.8光年、光度マイナス1.5等。白色矮星と連星をなす。
- 15) テオドゥル峠はスイスとイタリアをつなぐ峠(3136メートル)。以下の地名はスイスのルツェルンから、レポンティーネ・アルプスを越えてイタリアに向かう行程にある街や、そこから見える峠などである。
- 16) イヴォルヌはスイス産白ワイン。
- 17) ピッツォ・ルツェンドロはレポンティーネ・アルプス中の山(2963メートル)。アイロロはスイス、ティチーノ州の小郡。ベドレット溪谷はアイロロ付近の溪谷。ヴィラ、フォンタナは溪谷中の地名。ピアシーナはアイロロからジョルニコに向かう途中にあり、鉄道のループ線で有名。

ピオラはアイロロの東にある地名。サン・ジャコモはアイロロ南西、ベドレット溪谷の峠。ルコマニョはアイロロ東方の峠。アムブリ、ピオッタ共にアイロロ東方、イタリアに向かう途中の村。
- 18) 「声の所有者」で述べられた幻灯機による映像が映し出されている。
- 19) ザンクト・ゴットハルト(フランス語ではサン・ゴタール)はアイロロと

ゲシェネンを結ぶアルプス越えの峠(海拔2108メートル)。峠の下はトンネル(1982年開通)で結ばれている。アンデルマットはゴットハルト峠の前の温泉のあるリゾート。「ホスピス」は、古くは、修道会などの宗教団体が巡礼や参拝者のために設けた宿泊所。

- 20) 星座中の星は、明るさの順に  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$  のようにギリシア文字で示される。  
21) エスペラント語はポーランドの眼科医ザメンホフ(1859-1917)が1887年に創案し発表した人工言語。「エスペラント」は「希望する人」の意で、ザメンホフの筆名。

新ラテン語は、ペンギン版注によれば、イタリアの数学者で自然数の公理系(ペアノの公理)などを考案したジュゼッペ・ペアノ(1858-1932)が1903年に国際補助言語として発表した「屈折のないラテン語」であろうとのこと。

ラング・ブルー La Langue Bleue はフランス人レオン・ボラック(1859-?)が1899年に国際補助語として発表した人工言語。「青い言語」の意で、青は地球を取り巻く空をさす。

ヴォラピュークはドイツ人ヨハン・シュライアー(1831-1912)が1880年に国際補助語として発表した人工言語。

リットン卿はエドワード・ジョージ・ブルワー＝リットン(1803-1873)、イギリスの政治家、著述家。著書に『ポンペイ最後の日』(1834)、『ザノーニ』(1842)、『不思議な物語』(1862)、『来るべき種族』(1871)などがある。ユートピア小説『来るべき種族』では地下世界に住むヴリル＝ヤ族の高度に進んだ言語が説明されている。

ウェイトリー大主教はリチャード・ウェイトリー(1787-1863)、オックスフォード大学教授。著書に当時の基本的教科書『論理学原理』(1826)、『修辞学原理』(1828)がある。1831年よりダブリン大主教。

ウェルビー准男爵夫人はヴィクトリア・ウェルビー＝グレゴリー(1837-1912)。独学で神学、哲学、意味論に関する著書を発表した。意味学 Significs は言語の意味研究として彼女が考案した語で、1911年に『ブリタニカ百科事典』の「意味」に関する項目執筆で用いた。著書に『意味とは何か?』(1903)や『意味学と言語』(1911)がある。

- 22) ボールドウィン教授はジェームズ・マーク・ボールドウィン(1861-1934)、アメリカの心理学者。ペンギン版注によれば、ダーウィニズムを発達心理学に適用した。  
23) オーギュスト・コント(1798-1857)の社会学における壮大な体系化を示唆していると思われる。  
24) 〈大公教要理〉はカトリックの教理問答書。  
25) (原注) 真摯な読者は余裕のある時に以下の著作を参照するとよいだろう

う。セジウィックの『推論における語の効用』(特に勧めたい)、ボザンケットの『論理の基礎』、ブラッドリーの『論理学原理』、ジグワルトの『論理』である。もっと軽いものという読者には『大英百科事典』中の「論理」の項目(第30巻)におけるケイス教授の考え方を読み、注目するとよいかもしれない。本書には新しい方向に沿った哲学の概観を付録としてつけたが、これは、もともとは私が1903年にオックスフォード哲学協会で発表したものである。

(訳注 アルフレッド・シジウィック(1850-1943)はイギリスの哲学者、論理学者。バーナード・ボザンケット(1848-1923)はイギリス新ヘーゲル派の哲学者。フランシス・ハーバート・ブラッドリー(1846-1924)はイギリスの理想主義哲学者。クリストフ・フォン・ジグワルト(1830-1904)ドイツの哲学者、論理学者。トマス・ケイス(1844-1925)イギリスの哲学者。『ブリタニカ百科辞典 11版』(1911)で「論理」などの項を執筆。付録とはウェルズの講演「道具についての懐疑」を指す。)

- 26) イギリスの科学雑誌『ネイチャー』は創刊号(1869)扉頁にワーズワースの詩「空を飛ぶ詩人の一族が生きているのが発見された」“A Volant Tribe of Bards on earth are found”(1823)の一節「〈自然 Nature〉の硬い地面に、ものを打ち立てる精神は永遠に頼る」を掲げていた。
- 27) 原注 次の見事な記事を参照のこと。レオン・ボラック「2003年のフランス語」、『ラ・レヴュ』誌1903年7月15日号。(訳注 ボラックについては注21)参照)
- 28) ルツェンドロ湖はザンクト・ゴットハルト峠にある湖。
- 29) フログナルはロンドン北西部の高級住宅地であるハムステッドの一画。